

もう一つの'89APWSS韓国会議紀行

農業生物資源研究所 坂 齊

は じ め に

この夏、第12回APWSS（アジア太平洋雑草学会）が開催された韓国ソウル（Seoul）市は、例年になく大小雨に見舞われて夏らしくなく、私が滞在した10日間（8月20日～29日）も、そのうちの半分近くが雨天で、ソウルに着いた日と離れた日はいずれも土砂降りであった。本稿はそうした状況下での駆け足紀行である。APWSSそのものの報告は本誌（23巻11号）や雑草研究（34巻4号）等で目にする機会があるので、ここでは深入りを避けた。

私にとってはAPWSS会議への出席はもとより韓国行も最初である。韓国は、地理的にはわが国に最も近い外国の一つではあるが、過去10数年の私の数少ない海外渡航経験に照らしてみると、私にとっては最も遠い国であった。

韓国といえば、農水省試験研究機関関係者による科学技術・研究交流に基づいた無数とも言える報告書があるだろうし、公刊図書や案内書も多く、後発の私が今更という気持ちがないわけではない。過去のそうしたデータはもちろん観光案内書すら読むこともせず（実のところ日常に追われていて、そうした余

裕は全くなかった）に初めて訪れた国に対する印象は、不勉強故にホットなものであると画自賛して筆を執ってみた。

APWSS イン ラマダ・ルネッサンス ホテル

7月20日（その日は参加登録だけ）に始まった会議は、ソウル旧市街（写真1）を黄海に向かって東西に還流する漢江の南側に、近年新しく開発され昨年のオリンピックと共にその発展が加速している新市街地のラマダ・ルネッサンスホテルが会場にあてられた。運営は、事務局担当の慶北大学、K. U. Kim教授らのグループと農業技術研究所D. S. Kim所長をはじめとして、学会期間中の活躍が目立った

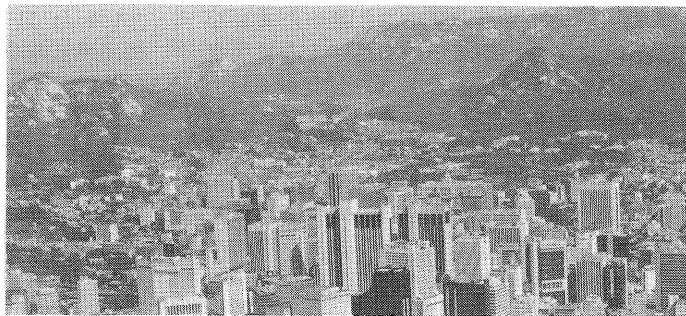


写真1. ソウル市街と近郊の山

南山公園のソウルタワー展望台からソウルの北々西側をみる。道路にあふれる人と車などの喧噪からはほどおいたために、クリーンで落ちついた街に見える。道路の清掃はゆきとどいている。巨岩で樹木が生育しないために白くみえる山々がソウル市をとりまいている。

農村振興庁などの研究者との強力なチームワークで終始スムーズに行われた。大会は、7月25日のシンポジウムをメインイベントにして盛り上がり、その日の夕刻から始まった国立古典音楽会館での韓国伝統芸能観賞と隣接する野外ホールで開かれたフェアウェル夜会で一応幕を閉じた。お世話いただいた大会関係者の皆様には心からお礼を申し上げたい。

さて、21日の朝、一日遅れで会場に着いて会議参加の登録を済ませ、それまで不明だった自分の発表日と時間を調べてみて驚いた。発表が24日午後のトップバッターというのはまあいいとしても、その時間帯と重複して別の会場で宮原氏（九農試）とともに座長を務め、約2時間演者と聴衆とのアレンジをするハメになっていた。私は、自分の発表に先立って、共同発表者になっている武富氏（北興化学）発表分の打ち合わせを行ってその発表（22日）に立ち会った。これまで懸案だった私達の報告は、「ハルジオンの除草剤抵抗性の生理・生化学的機構」についてであった。

本講演会全体を通してみて残念であったのは、演者の欠席であった。どの会場でも見られた風景だったが、講演会途中で演者不在による休憩回数が以外に多く、そのために講演会場の張り詰めた緊張の糸が時々緩んだ。こうした中で、座長を務めたことは帰国後まったく予期せぬ文化的な喜びを私に与えてくれることになった。

スウォン（水原）とミリャン（密陽）

水原と密陽という名前は、イネに関心を持つ人には馴染みが深い（写真2）。いずれも日印交雑イネの品種名の由来にもなっている韓国の農業研究のメッカとして有名

である。ソウルの少し南の水原ともっと南にあるらしい密陽に一度訪問したいという思いは、かねてから強かった。水原には農村振興庁庁舎を始め、農業技術研究所、作物試験場など数多くの農業関係研究機関のコンプレックスがある。わが国でいえば筑波の農林研究団地みたいなものである。半島南岸にある釜山市の北約60 kmにあり標高数百メートルの静かな田園風景が広がる密陽には、水田と畑の試験研究を行う農村振興庁嶺南作物試験場がある。

今回の短期韓国滞在中、私には水原を4回も訪問する機会があった。主に、かつて太田室長（現東京農大教授）が主宰した私の研究室に研修などで長期滞在し、現在はこうした研究機関で活躍されている人達による招待であった。懇親のためのフィールド・トリップ（23日）以外は、講演会終了後の訪問で、夜中の交通渋滞の

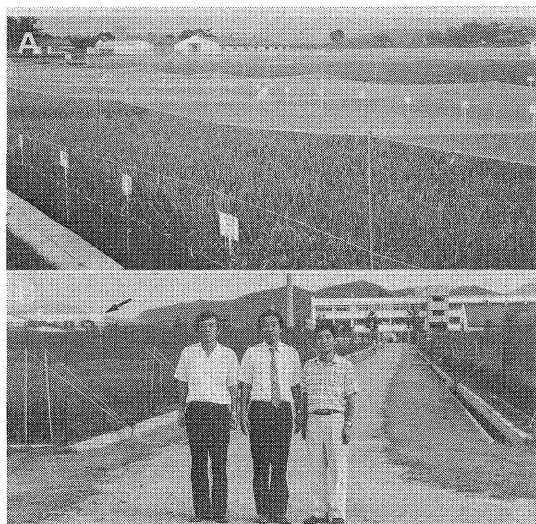


写真2. 水原の農村振興庁の作物試験場（A）と密陽の嶺南作物試験場（B）

Aでは、薬培養で花珍、花成、花晴などの品種がつくられており、日本型の食味のよい品種の育成にも取り組んでいる。

Bの後方の白い建物は本館で、向って右側の棟は増改築が進んでいた。矢印は、4棟の大ガラス温室の作業棟とバイテク室、人物左側は、徐亨洙畑作科長、右側は全弘烈氏。

なかを高速バスや高速（／）タクシーで往復した。韓国の社会・文化・人情の機微に触れるいい機会であった。全体的な感想であるが、韓国の道路の幅は、わが国のそれに比べて遥かに広いとの印象を受けた。それは、公園・名所旧跡の取り付き道路や入口の階段の幅の広さにまで及んでいて、単に経済効率だけに捕われないという余裕が感じられた。韓国的发展を象徴するものであり、足腰の強さを痛感した。

さて、水原では、私達との関係で言えば、薬培養などバイオテックによるイネの新品種作出（写真2）とその栽培生理特性調査が進むと共に、除草剤による難防除雑草の防除法や生長調節剤（主に矮化剤の倒伏軽減剤としての利用）に関する基礎と適用性試験が行われている。除草剤については、厳しい日本での適用規制が必ずし

も韓国ではいいとは限らず、時として薬害に見舞われることもあるとのことであった。密陽では、バイオテック研究室や大規模ガラス温室（写真3）を備えての作物の基礎試験と共に、水田でのより実用的な除草剤（一発剤）、生育調節剤（主に矮化剤の倒伏軽減剤としての利用）の作用特性検定試験が行われている。除草剤は、ここでもイネへの薬害発現に特に注意して試験されているようであった。

冬の寒さは別にしてわが国と自然環境条件が良く似た韓国のこと、わが国で試験される事柄は少なくともすべて網羅されている。しかしながら、わが国でと同様、韓国でも近年のお米の生産過剰には悩んでおり、現在水田の畑化が振興され、それに適する韓国特産の作物の探索とその適用性評価試験を実施中とのことであった（写真3）。そういえば、韓国では、わが国でみられるような転換畑に関するプロジェクト研究が、わが国の協力で今年からスタートしている。水原の農村振興庁でみた韓国「緑の革命」のレリーフに、今更ながら想いを寄せた。

石の文化・木の文化

韓国では、以前はげ山が多かったという。相対的にわが国よりも冬の寒さが厳しいために、韓国特有のオンドル用の燃料に樹木を多用したためと聞かされている。近年は練炭や化石燃料になり、山肌も緑が多くなったといわれているが、南山公園のタワーの展望台から私が見たソウル近郊の山々は白っぽいところが多く、どうみてもはげ山である（写真1）。実は広範囲にわたって石が露出しているためで、山の中腹だけでなく稜線にも巨岩が横たわっている。ソウルから密陽を経て南岸の晋



写真3. 嶺南作物試験場（密陽）の畑圃場（上）と大ガラス温室（下）

圃場では、転換畑用にキキョウ、シャクヤク、など特用作物の栽培特性試験が行われている。キキョウは、ある系統の根が、トラジという名で、食用に供される。美味である。

温室では、バイオテック棟で創製されたイネ系統などの育成に供される。一棟は50m×12mの大きな容積をもつ。

州（チンジュ）へ汽車で往復した際の車窓風景もよく似たものであった。雨の多い両国でありながら、現在のわが国の、高山帯は別にして、全山これ緑とも言える樹木の多さとは極めて対照的である。

こうした自然環境と韓国における古代新羅時代などの仏国寺（写真4）、石窟庵などにみられる石橋・石塔・石仏遺跡とを対比させると大変興味深い。インドに起こった仏教がガンダーラに移り、敦煌などシルクロードを通して中国・朝鮮半島を経てわが国に伝来した経緯は、もの本で知っているが、このことは、慶州の華麗な仏教芸術遺跡群でも実感できる。彼らは、全国的に散らばっている豊富な石を仏教思想の具象化の材料にした。大陸からの石の文化を取り入れて消化し、石の側に重点をおいた石と木の折衷文化を生んだといえる。わが国に野仏が多いが、その原形はトルハルバン等の石像にみることができよう。こうした石の文化の影響を受けたわが国では、木造建築物の敷石や城郭建築の石積みなどに見るように、古来からの木の文化に石を絡



写真4. 石の文化と木の文化の融合

慶州市の仏国寺にみる石と木の見事な調和
高さ4m程度の石垣の上に建てられた仏国寺に通じる2つの橋（矢印と手前、いずれも国宝）は俗界と浄土の接点とされる。この風景は、韓国の農業をはじめ、政治・経済・文化のあらゆるものの原点と考えることができる。

ませて木文化を補強したのである。かつて、私の研究室に滞在されて研鑽を積んだ農業研究所の姜 忠吉博士の案内で見学した慶州（キョンジュ）の石の芸術遺跡群を眺めているとそんな考えが脳裏を駆けめぐった。日韓文化の強い繋がりを実感すると共に、私自身の、これまでの韓国との文化的距離の遠さにも改めて驚いた。

一方で、この石は地質学的には朝鮮半島全域を覆っているものと考えられ、従って、農業への影響も強烈で、かつ深刻なのであろう。有機質が少なく耕土の浅い痩せ地を想像したら米の生産過剰に悩む国に対して失礼かも知れないが、このことが、わが国では極めて低頻度の除草剤の薬害発現と関係する部分であろう。

おわりに

本拙文は、初めて訪問した韓国について、私の情緒的な印象を記したもので、識者から科学的展開の希薄な個所が多々あるとのご批判やお叱りを受けるのはもとより覚悟の上である。一つの見方として捉えていただきたい。なお、帰国後スーツケースを開いて初めて気付いたことであるが、APWSSの座長のお礼は透明樹脂に埋め込んだかなりの重さの金冠塚金冠（国宝第87号）のミニチュアであった。この宝物は、紀元5～6世紀に当時新羅の王がその象徴として使用したとされる翡翠のまが玉を数十個もあしらった豪華な金冠で、今回の慶州国立博物館見学の際、息を止めんばかりにのぞき込んだあの代物なのだ。今回のAPWSSに賭けた韓国雑草学会の意気込みと暖かい心づくしが伝わってくるようである。

最後になったが、今回の私のAPWSS出席補助に対して日本雑草学会に感謝の意を表したい。